

「医の倫理」を考える

品川 信良

医の目的は、人命を尊重し、これを傷ついたり短縮したりしようとするものを、できるだけ排除し、一人でも多くの人に天寿を全うさせることにある。そのため具体的には、「公衆衛生の向上および増進」にも寄与し、「国民の健康な生活を確保」しなければならない。したがって、単なるヒポクラテスへの回帰や、一方的な社会への奉仕や献身が医の目的ではない。それは十分「今日的」でなければならぬし、「社会的」に広く受け入れられるものでもなければならぬ。これらの点を強調したのち、次の十点について私見を述べてみたい。

- 1、人命はなぜ尊重されなければならないのか
- 2、人を死亡させることはなぜ悪いのか
- 3、なぜ殺人ということがあるのか
- 4、自然死と不自然死
- 5、動植物の生命は尊重されなくてもよいのか
- 6、人命に軽重はあるのか
- 7、医師患者間の関係はなぜ近年阻害されがちなのか
- 8、現代医療の医療史上の位置づけ

- 9、医療における平等主義 (egalitarianism) と功利主義 (utilitarianism) の限界
10、医師と Profession (医師と他の職業との主な違い)

そして最後に、「医療は一体誰のためのものか」を考えてみる。医療は、できるだけ多くの、それも立場を異にする人びとのためのものでなければならぬ。国民のエゴ、医師を始めとする医療担当者側の利益や特権擁護、関連業界の利潤追求、政治家の政治的功名心、関係官僚の行政上の野心、関係事務官の事務能率の向上、関係法律家の偏狭な社会正義感などが余りに強く主張されたり、ごり押しされてもいけない。皆がほどほどに節度や、自己抑制を守ることが大切である。これらの立場の違うものの利害を調整するのは政府や地方自治体の仕事であって、医療のすべてを掌中におさめることが政府や地方自治体の仕事ではない。

所詮、国民の水準が向上しない限り医療の水準は向上しないし、医の倫理も確立されにくい。

文 献 (いずれも自著)

- 1 医療医学序説—よりよい医療を求めて、医学書院、一九七八年
- 2 誰(た)がために医療はある、メジカルビュー社、一九八三年
- 3 医療と社会、津軽書房、一九八三年
- 4 医療と人権—特に医療資源が不足しているときの優先順、日本医師会雑誌、九〇巻 一一三六頁、一九八三年
- 5 周産期医療における倫理的ジレンマ—特に胎児や新生児と人権、助産婦雑誌、三七巻 九九六頁、一九八三年
- 6 現代の医療とヒポクラテスの誓い、青森県医師会報、第二六九号 七八頁、一九八四年
- 7 医師と Profession、青森県医師会報 第二七三号 三四〇頁、一九八四年
- 8 医師(と医師会)の任務、青森県医師会報、第二七五号 四七七頁、一九八四年
- 9 核戦争防止世界医師会議に出席して、軍縮問題資料、No.47 一五頁、一九八四年

- 10 社会の医療化 (Medicalization) と医療の社会化 (Socialization)、青森県医師会報、第二七七号、六一四頁、一九八四年
- 11 医療に対する世論の変化と消費者運動、青森県医師会報、第二七八号、六八六頁、一九八四年
- 12 二一世紀へのメッセージ、青森県医師会報に投稿中 (第二八〇号、一九八五年に掲載予定)

(弘前大学医学部産科婦人科学教室)

「父の論戦」ダイダロフの存在